

初期真宗における真実報土の理解

—特に了海の『他力信心聞書』を中心に—

板 敷 真 純

はじめに

中国浄土教の道緯（四七六～五四二）と善導（六一三～六八一）は、阿弥陀仏は誓願と修行に報いて仏となった報身仏であるために、この阿弥陀仏の浄土を報土という¹と説いている。親鸞（一一七三～一一六二）によれば、この報土には真実報土と方便化土の二土があり、真実報土には他力真実の信心を得た行者が往生し、本願を疑う自力の行者は方便化土に往生すると記し、これらはどちらも阿弥陀仏の真化の浄土と主張している。

先行研究では、このような主張は善導、源信の説を独自に解釈したもので、親鸞以前には見られない特異な見解であるといわれている³。また親鸞は、現生に正定聚に住して、真実報土に至るとも記しており、これらは、親鸞が説いた現生正定聚という位が、真実報土と不可分の関係を持つことを示している。このような主張は、往生思想の根幹にあたる部分であるために、常に注視されてきた⁴。

しかしこれらの点は、非常に重要であるにも関わらず、このような

真実報土について、親鸞の門弟たちがどのように理解していたかについては、必ずしも明確になっていない。唯一、唯円の『歎異抄』に報土に対する記述があるのみである。このように親鸞の門弟達の中で真実報土に対する理解が明らかになっていないという点は、初期真宗の浄土観、往生観を究明するうえで、大きな問題であった。

ここで注目すべきは、初期真宗で活躍した麻布了海（一二三九～一三二〇）の作といわれる『他力信心聞書』に、真実報土に関する記述が見られる点である。『他力信心聞書』では、全十四問答中の三問答をさいて、報土についての説明をしているが、この点についての詳細な論究は行われてこなかった。

先行研究では、この『他力信心聞書』は、本願寺覚如（一二七〇～一三五二）の『改邪鈔』の批判の対象であったと考えられている⁵。さらに梯実圓氏などにより、本書に善知識婦命説や来迎往生などの影響が見られるとし、親鸞とは異なる教えが説かれていることが指摘されている⁶。

このように親鸞とは異なる思想を持っていたと考えられている了海

であるが、『他力信心聞書』の眞実報土に対する記述のなかには、親鸞の眞実報土説と同様の主張も見られる。このため『他力信心聞書』がどこまで親鸞の思想と一致しているのか、再検討する必要があるが出てきた。

本論では麻布了海の作といわれる『他力信心聞書』に焦点をあてて、眞実報土と方便化土について検討を行う。これにより、初期眞宗の門弟たちの眞実報土の理解について明らかにすることが出来、日本浄土教の浄土観の一面を究明することが出来ると考える。

1 親鸞と唯円にみる眞実報土の理解

1-1 親鸞の眞実報土説の特異性

まず最初に親鸞の眞実報土の理解について確認したい。以下は元仁元年（一二二四）に記され、親鸞の眞実報土観が詳細に記される『教行信証』の「眞仏土巻」の序文である。

①親鸞『教行信証』元仁元年（一二二四）

謹で眞佛土を按ずれば、佛は則是不可思議光如来なり、土は亦是无量光明土なり。然れば則ち大悲の誓願に酬報するが故に、眞の報佛土と曰ふなり。既に而て願有ます、即光明・壽命之願是也。⁷

ここで親鸞は、眞仏土について説明を行っている。つまり仏とは不可思議光如来であり、土とは無量光明土のこととし、阿弥陀仏の大悲の誓願の因に報いているので、阿弥陀仏の浄土を眞の報仏土であると

している。⁸ また同様に『教行信証』の「眞仏土巻」の結文を見て行きたい。

②親鸞『教行信証』元仁二年（一二二四）

夫れ報を按ずれば、如来の願海に由て果成の土を酬報せり。故に報と曰ふ也。然に願海に就て眞有り仮有り。是を以て復佛土に就て眞有り假有り。選擇本願の正因に由て、眞佛土を成就せり。假の佛土とは、下に在りて知るべし。既に以て眞仮皆是大悲の願海に酬報せり。故に知んぬ、報仏土也といふことを。良に假の仏土の業因千差なれば、土も復千差なるべし。是を方便化身・化土と名づく。

ここで最初という報とは、阿弥陀仏の報土のことである。ここで親鸞は先の報土にさらに眞と仮があるとし、この眞と仮は、どちらも阿弥陀仏の願海から生じたものとしている。このため眞とは、報土のなかの眞実報土のことで、仮の仏土とは、報仏土のなかの方便化土のことであると説いている。¹⁰

このように親鸞は、阿弥陀仏の浄土を眞実報土と方便化土によって説明し、阿弥陀仏の眞仮の浄土はどちらも阿弥陀仏の慈悲により生じたと説いている。このような点は、師匠である法然にも見られない親鸞の特異な思想であるといわれてきた。¹¹

それでは親鸞は、眞実報土に対して、門弟たちにどのように説いているのだろうか。次に親鸞が門弟たちに出した消息から、眞実報土に

ついでどのように理解していたかを見て行きたい。以下は親鸞の門弟である有阿弥陀仏に対して出された消息である。またこの有阿弥陀仏という門弟についての詳細は不明である。

③親鸞『末灯鈔』「第十二通」年代不明

尋ね仰せられ候ふ念佛の不審の事。念佛往生と信ずる人は、邊地の往生とてきはれ候らんこと、おほかたこゝろえがたく候。そのゆへは、弥陀の本願とまふすは、名號をとなへんものをば極樂へむかへんとちかはせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり。信心ありとも、名號をとなへざらんは詮なく候。また一向名號をとなふとも、信心あさくば往生しがたくさふらふ。されば、念佛往生とふかく信じて、しかも名號をとなへんずるは、うたがひなき報土の往生にてあるべくさふらふなり。詮ずるところ、名號をとなふといふとも、他力本願を信ぜざらんは邊地にむまるべし。本願他力をふかく信ぜんともがらは、なにごとにかは邊地の往生にてさふらふべき。このやうをよく／＼御こゝろえ候て御念仏候べし。¹²

ここでは念仏往生を信じる人は、辺地の往生を遂げるとして批判する人がいるという消息に対する親鸞の返信である。ここで親鸞は、このような主張は、理解出来ないこととし、念仏往生を深く信じて名号を称えれば、間違ひなく報土に往生すると主張する。そして名号を称えても本願を信じなければ、辺地に生じるとして、信心と名号が不離の

関係であることを示している。

ここでの辺地の往生を遂げるとする批判は、親鸞の弟子達の中の問題とも、親鸞門流外からの念仏批判ともとれる文であるが、¹³当時の門弟たちのなかで、辺地に対して疑問が起こっていたと推察出来る。

1-2 唯円の『歎異抄』に見る真実報土の理解

次に河和田唯円（？一七八）の『歎異抄』から、唯円が真実報土に対して、どのように理解していたかを確認したい。以下に第十七章を見て行きたい。

④唯円『歎異抄』十七章

一 邊地往生をとぐるひと、つゝには地獄におつべしといふこと。この條、なにの証文にみえさふらふぞや。學生だつるひとのなかに、いひいださるゝことにてさふらふなるこそ、あさましくさふらへ。（中略）信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて、邊地に生じてうたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひらくこそ、うけたまはりさふらへ。信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすゝめいれられさふらふを、つゝにむなしくなるべしとさふらふなるこそ、如来に虚妄をまふしつけまひらせられさふらふなれ。¹⁴

ここでは最初に辺地往生を遂げる人は、最後には地獄に墜ちるといふ誤った主張を記し、この主張はどの聖教に載っている文か、と疑問を

なげかけている。さらに信心が欠けた行者は、本願を疑っているので辺地に生じて、その後報土のさとりをひらくと親鸞から聞いていると述べている。そして阿弥陀仏は、信心を得た行者が少ないことを考へ、まず自力の行者を化土に勧めて往生させようとしているので、化土に生まれたものは地獄に墜ちるといふ誤った主張は、阿弥陀仏をうそつきにしようとするに記している。

このように自力の行者のために化土を勧めると記している点は、唯円が真実報土も方便化土も阿弥陀仏の浄土であるという理解をしていることを示しており、親鸞の真実報土観を唯円が理解していたことが分かる。¹⁵ 注目すべきは、辺地化土に往生を遂げる行者は、最後には地獄に墜ちるといふ誤った主張が見られる点で、唯円の周辺でも親鸞が説いた化土往生について、正しく理解することが出来なかった門徒がいたことを示している。

以上のように親鸞は、阿弥陀仏の浄土を報仏土と説き、この報仏土を真実報土と方便化土に分けて、真実報土に対する説明を行っているが、このような主張は、親鸞独自のものである。また真実報土の理解は、唯円のように親鸞の真実報土の理解を継承した門徒もいたが、親鸞の消息や『歎異抄』には、方便化土に対する誤った見方や疑問をもっていた門徒がいたことが分かる。

2 了海の『他力信心聞書』に見る真実報土の理解

2-1 『他力信心聞書』の成立と内容

まず麻布了海（一二三九～一三三〇）の門流と彼の作といわれる『他力信心聞書』についてまとめた。¹⁶ 親鸞の門弟たちは常陸、下総、下野を中心に活躍したが、その中でも初期の武蔵で活躍したのが、真仏を祖とする荒木門徒の光信房源海である。源海は親鸞没後の関東教団の代表にあたる人物で、後の大谷廟堂の取り決めを記した「大谷廟堂創立時代文書」の「信海等念仏衆に告状」には、高田の顕智、鹿島の信海とともに、光信の名を見ることが出来る。¹⁷ この荒木門徒の源海の弟子にあたるのが了海である。了海は、その半生がほとんど明らかになっていない人物であるが、『親鸞聖人門侶交名牒』「京都光蘭院本」では、多数の光信房源海の弟子中に「願明 ムサシノクニアサフノ了海」¹⁸と記されており、了海の下に十六人の弟子がいたことが記されている。¹⁹ またこの了海の門流から、後述する仏光寺了源がいる。

この『他力信心聞書』の著者については、江戸時代には覚如説、了海説などの複数の説があったものの、現在では『他力信心聞書』が初期仏光寺では了海作と考えられていたことが認められている。たとえば佐々木英彰氏は『他力信心聞書』は、伝了海作と記しており、²⁰ 澁谷晃氏も『他力信心聞書』と『還相回向聞書』が了海の作であることを推定している。²¹ また梯実圓氏は、仏光寺了源（一二八四～一三三五）

が嘉暦二年(一三二七)に記した『念仏相承血脈掟書』や建武元年(一三三四)に記された『一味和合契約状』に、『他力信心聞書』が了海の作と記していることから、仏光寺教団やその源流となった門徒集団の中で伝持された思想信仰をまとめたものと記している。²²

この『他力信心聞書』の原本は現存しておらず、書写本のみが残っている。最古の書写本は、暦応二年(一三三九)の奥書がある兵庫庵撰寺蔵の書写本であり、その他に、室町末期の滋賀円照寺蔵、京都常楽寺蔵の書写本がある。²³ 先行研究における『他力信心聞書』に対する論及は、了祥(一七八四〜一八四二)が真宗の異義を集めた天保十二年(一八四一)刊行の『異義集』や、この『異義集』を翻刻した真宗資料集成を定本としているが、それ以前の元禄七年(一六九四)の奥書がある大谷大学本と比較すると、²⁴ 『異義集』に記された文字の右にある解説や、左の左訓などが大谷大学本にはなく、²⁵ 『異義集』中の『他力信心聞書』の文字の欠落などが確認出来る。²⁷ このため先行研究では、解説や左訓なども了海の記述として論及されてきたが、後世の加筆とも考えられるため、再度検討する必要がある。

これらの点から当時仏光寺に安置されていた『他力信心聞書』は、了海が記した原本はないものの、了源などの初期の仏光寺教団内では、祖師である了海が記した聖典と考えられてきたことが分かる。また『念仏相承血脈掟書』、『一味和合契約状』の記述から、了源は、『他力信心聞書』の問答形式を、師である源海が弟子である了海の質

問に答えたものという認識を持っていたことが分かる。

また本書の内容について、従来この『他力信心聞書』には、親鸞の教えとは異なる点があることが指摘されてきた。²⁸ その内容は特に、善知識への帰依を要求する知識帰命説や来迎往生の推奨、真言密教や本覚法門の影響などがあり、親鸞との思想的な相違点は多岐に渡っている。さらに覚如が真宗内の異義について記した『戒邪鈔』の異義の一つとも考えられている。²⁹

2-2 了海における真実報土の理解

最初に了海における真実報土の理解について見ていきたい。まず了海が阿弥陀仏の浄土が報身であり、報土と説いている点は『他力信心聞書』「第十一問答」に見られる。

⑤ 『他力信心聞書』「第十一問答」

問テイハク、阿弥陀仏ヲバ報身如来トイヒ極楽ヲバ報土ト先徳ミ
ナノタマヘリ。報身トイフハ法身ノ智因ニムクフ果ノ名ナリ。サ
レバ智仏智土ナリ。モシシカラバイカニシテカ分量分限ヲサ、ン。
シカルニ観経ニハコノ仏ヲバ身量六十億那由他恒河沙由旬ト
云々。其仏寿命四十劫ト云々。スデニ身量ニ高下アリ、寿量ニ遠近
トヲチカキアリ。土ニ方角ヲサシタリ。報身トトキナガラ、身量ニ寿
量ヲタツル義、イカンガ候ベキ。

師答云、モトヨリ報身ニ身量寿量ナシトイヘドモ、シバラク所化

ノマヘニツイテコレヲタツルナリ。非常ノコトバハ常人ノ耳ニハ
イラズトノタマヘルガゴトクニ、形色カタチイロナクシテコレヲシメ
サンニハ、衆生シルベカラズ。カルガユヘニ、身量寿量短促ナル
衆生ニモチヒラレンガタメニ、如虚空ノ体ヲツゞメテ、阿弥陀仏
トナノリテ限量ヲアラハシタマヘリ。直ニ報身功用ヲトカバ、大
乗ノ菩薩スラ聞シリガタシ、イワンヤ末断惑ノ凡夫イカニシテカ
シラン。³⁰

ここでは阿弥陀仏を報身如来といい、極楽を報土ということは、先
徳がすでに説いていることとし、それなら何故仏の寿命や身量などを
定めているのかという問いを出している。それに対する答えとして、
本当は報身の身には寿命や身量などはないが、衆生の教化のために仮
に用いていると記している。このように了海は、親鸞と同様に、阿弥
陀仏の仏身は報身であり、阿弥陀仏の浄土が報土であると主張をして
いる点が確認出来る。

また了海の特異な浄土の説明については、筆者が別稿にて論究を行っ
た。³¹ その内容を要約すれば、以下の通り。

・了海は『他力信心聞書』において真実報土を解説して、法蔵菩
薩が二百十億の浄土から「化」を捨てて「真」をとったと主張
するが、この主張は、了海独自のものである。

・了海が法蔵菩薩を重視しているのは、『還相廻向聞書』にも見
られる。ここでは法蔵菩薩と道場主はどちらも衆生利益を目的

としているため、この点において両者は等しいと主張している。
このような了海の法蔵菩薩の重視は、善知識帰命説を主張する
ための一文であったと考えられる。

以上のように了海は、法蔵菩薩を用いて、特異な浄土の解説を行っ
ているが、このような思想は親鸞には見られない了海独自のものでは
ない。また了海が『他力信心聞書』、『還相廻向聞書』で、法蔵菩薩を重
視しているのは、善知識帰命説を主張するための一文であったと考え
られる。

2-3 親鸞の真実報土説の特異性に対する了海の認識

それでは了海は、親鸞の特異な真実報土という浄土観について、ど
のように理解していたのだろうか。阿弥陀仏の浄土について「十三問
答」の中で以下のように記している。³²

⑥了海『他力信心聞書』「第十三問答」

師答テイハク、タトヒマナコヲタ、カズ。コレヲマモリ、身ヲハ
ナレズ、ツケツカフトモ、信ゼズハシラザル人ナリ。(中略)行
住坐臥不背西方涕唾便利不向西方ノオシヘニイヅレカソムカン。
コレスナハチ不退思念ノ人ナリ。サレドモコレヲ外儀ノフルマヒ
ニテ、信心ニハイタラズ。タゞ願力ネカノ信心ヲ専ニスルヲ、善導ハ
念念不捨憶念知識是名正定業ト積知識シタマヘリ。念念不捨者トイフハ信心ノ
名リ。正定業トイフハウルトコロノ果ノ名ナリ。コレ弥陀ノ他力願(弥陀)力(知識)

ヲシレル名ナリ。コノ他力ヲ信ジテヨラシラザルユヘニ、コレヲ
 經二ハ一向トトキ、憶念知識 釈二ハ專修トイフハ、フタゴコロナク一向
 專修ニ修行スルユヘニ、コノ流ヲバ浄土宗ノナカニモ真ノ字ヲオ
 キテ浄土真宗トイフナリ。コノ真ノ字ヲオクコトバ浄土ノナカニ
 浄土ナルガユヘナリ。コレ真ガナカノ真ナリトシルベシ。³³

この「第十三問答」は、一向専修の行者は、どのような念仏者であるかを説明している場面である。そして『捨遣往生伝』にある「行住坐臥不背西方涕唾便利不向西方」の教えを行う人は、不退不念の人であるが、これらは外儀の行いであると説く。そして阿弥陀仏の他力のみを知るところを一向といい、専修というとしている。最後にこのために、浄土宗の法脈の中で、真の字を設けて浄土真宗というとし、浄土の中の浄土であり、真のなかの真であるとしている。ここで了海は、阿弥陀仏の浄土の中にも真の浄土があることを説いている。

ここで注目すべきは、了海が自分たち親鸞門流の特徴として、真実報土の思想を浄土の中に浄土を設けることと理解しており、自分たちを浄土真宗という主張し、浄土真宗という名称の解説を行っている点である。ここで了海は、親鸞の浄土観を他の「浄土宗」とは異なるものと理解していたことが分かる。³⁴

またこのような「浄土真宗」という名称は、親鸞の『教行信証』や親鸞自身の消息のなかに、自分たち法然の門流を表す際によく用いていたものであるが、³⁵ここで了海の「浄土真宗」という一文は、親鸞

から続く自分たちの門流を指していると考えられる。³⁶

つまりここで了海は、親鸞の真実報土説が親鸞以前の法然を含む先徳から続いている思想であり、自分たち（親鸞の）門流はその教えを正しく継承していることを主張している。つまりここでの「浄土宗」とは、自分たち親鸞から続く門流以外の他の法然門下、親鸞から教えを受けた別の門徒集団を指すものと考えられるが、この点についてはさらに検討する必要がある。³⁷

したがってこの文は、了海が親鸞教学の特異な浄土思想である真実報土の思想は、他の浄土宗の教学とは、異なっていると理解出来ていたことを示す貴重な文であるといえる。³⁸

了海の『他力信心聞書』では、真実報土と方便化土を論じており、親鸞の真実報土は理解していたと考えられる。しかし法蔵菩薩が選択した二百十億の浄土や「総」、「別」の浄土など、特異な浄土の説明を行っている。これらは了海の著作に見られる善知識が仏や菩薩と等しいという善知識即仏説を主張する文の一つであると考えられ、親鸞には見られない了海独自の主張が見られる。

おわりに

以上了海の『他力信心聞書』を中心に、初期真宗の真実報土の理解を検討したところ、以下のことが分かった。

① 親鸞は、阿弥陀仏の浄土を報仏土と理解し、この報仏土を真実報

土と方便化土に分けて、真実報土の説明を行っているが、このような親鸞の真実報土観は、特異な主張であるといわれてきた。このような真実報土観に対して、親鸞の消息や『歎異抄』には、真実報土や方便化土に対する誤った見方をしていた門徒がいたことが分かる。これらのことから初期真宗の門弟達のなかには、唯円のように親鸞の真実報土の理解を継承した門徒もいたが、理解が困難であった門徒もあり、初期真宗内で大きな問題であったと考えられる。

②親鸞とは異なる主張をしたといわれる了海の『他力信心聞書』であるが、その文中から、親鸞の真実報土と方便化土の思想は理解していたと考えられる。しかし法蔵菩薩が選択した二百十億の浄土や「総」、「別」の浄土などの特異な浄土観は、善知識即仏説の影響が見られる。さらに了海は真実報土説に対して、他の浄土宗と浄土真宗を区別しており、親鸞の特異な浄土観が他の浄土宗と異なっていたことを理解していたと考えられる。

以上のように『他力信心聞書』を用いて、初期真宗の真実報土の理解を明らかにした。親鸞の独自の浄土観が初期真宗のなかで問題になったのは、初期真宗の門弟達が親鸞の思想を理解し、受容することが難しかったことが挙げられる

当初門弟達は、親鸞の教えが法然と同じであると考えていたが、他の浄土宗との関わりを持つにつれて、徐々に自分たちの教えが他の浄

土宗と異なっていることに気づいたものと考えられる。ここに門弟達が親鸞の教えを理解することが困難であった原因の一つがあると推察する。その後門弟たちは、親鸞の教えが理解しづらいという問題を内包しつつも、親鸞の特異な浄土思想を自らの門流の独自性として用いるようになった。ここに初期真宗の門弟達の受容と展開を窺うことが出来る。

このような親鸞門流の教学的な独立性の自覚は、長楽寺流、西山、一念義系を受学し、他の浄土宗との対外的な確立を目指し、自らの門流の正統性を主張した本願寺覚如、存覚によって確立されたと考えられてきたが、³⁹⁾『他力信心聞書』などにより、門弟達の間でも行われていたものといえよう。このような本願寺教団と門弟たちの教学的な独立性の自覚については、今後の課題としたい。

注

1 道綽の『安楽集』と善導の『観経疏』『玄義分』では阿弥陀仏の浄土が報土であることを説いている。

「現在の弥陀は是報仏、極楽宝莊嚴国は是報土なり。」『安楽集』(真聖全一、一七六頁)

「第六に二乗種不生の義を会通すとは、問ひて曰く、弥陀の淨国は為当是報也や是化也や。答へて曰く、是報にして化に非ず。云何知ることを得る。」『観経疏』『玄義分』(真聖全一、二九八頁)

また善導の報土、報身については、柴田泰山『善導教学の研究』(山喜房佛書林、二〇〇六年)五五五―五七二頁参照。

- 2 源信の報化二土については、義盛幸規「報化二土の弁立」(『親鸞教学』二〇〇七年)、八八号、三七〜五四頁を参照。善導の報土、報身についての先行研究は、注一を参照。
- 3 山邊習學 赤沼智善『教行信證講義 眞佛土卷 化身土卷』(法藏館、一九四一年、一二〇八〜一二〇九頁。)では、『教行信証』「眞仏土卷」の結文について、二点の注意すべきこととして、次のように記している。
- 「二には、真化分別は我が聖人已證の法門であつて、浄土眞宗開闢の祖意は、この真化を分別して、如来広大の恩徳を知らしめるためであること。二には、ここに化仏化土というは、普通にいう三身門の化仏化土とは異なり、報中真化を分つたもので、三身門でいえば、同じく大悲の願行に酬応した報身報土であるということである。」
- さらに梯実圓氏は、親鸞の往生観と浄土観について「親鸞聖人の往生観は法然聖人のそれを承けながらも、従来の浄土教には見られなかつたいくつかの特色がある」とし、「往生について真化にわたる三種の往生、すなわち双樹林下往生、難思議往生、難思議往生を分別されたこと」を挙げている。さらに「三往生についての真化の釈は親鸞聖人の独自の見解であつたのである」と記し、節の最後に「こうして難思議往生とは眞実報土へ化生することをいい、双樹林下往生とは、辺地、懈慢、疑城、胎宮、胎生などと呼ばれる方便化土の往生をあらわしていることが分かる。」(梯実圓「親鸞聖人の往生観」(『浄土教学の諸問題』上巻、永田文昌堂、一九八八年)二二二〜二二四頁。)
- と記している。
- またこのような点は、隆寛や名越派にも類似した思想があることが指摘されている。
- 4 石井教道『選擇集全講』(平楽寺書店、一九九五年)四七五〜四七七頁。正定聚は必ずさとりを開いて仏になることが正しく定まっていることであり、菩薩の五十二位の修道階位の一つであるが、親鸞は「教行信証」の中で、信心の行者が現生で受ける利益の最後に、「入正定聚の益」
- を入れてある。このため親鸞は正定聚が現生の益と考えていたことが分かる。
- また阿弥陀仏の眞実報土と方便化土や報身と法身に対する先行研究は、以下が詳しい。
- 緒方義英「親鸞の眞仏土観」(『印度学仏教学研究』、一九七七年)、九〇号、四二〜四四頁。
- 寺川俊昭「親鸞における往生の思想」(『宗教研究』、一九八二年)、二五〇頁、一七〇〜一七一頁。
- 加茂仰順「高祖の即得往生の意義」(『龍谷教学』、一九八二年)、一七号、一〇六〜一〇六頁。
- 櫻部建「眞仏土と化身土」(『同朋仏教』、一九八六年)、二〇・二二号、一二五〜一三二頁。
- 井上重信「眞仏土の一考察」(『眞宗教学研究』、二〇〇七年)、二八号、一七二〜一七三頁。
- 中村玲太「法然門流における弥陀法身 報身説の検討 弥陀は三世を貫く如来か」(『現代と親鸞』、二〇一五年)、三〇号、二二〜二七頁。
- 高田文英「『教行信証』報化二土の引文とその背景―懈慢界説の歴史的帰趨―」(『龍谷大学アジア仏教文化研究センター』二〇一八年度研究報告書、二〇一八年)一八七号、二一〇〜一九〇頁。
- 5 梯実圓「初期眞宗における善知識論の一形態」(『浄土教学の諸問題』下巻、永田文昌堂、一九九八年)三〜四頁。
- 6 前掲「初期眞宗における善知識論の一形態」、三〜四頁。
- 7 『親鸞聖人眞跡集成』、第二巻、三九九頁。
- 8 また親鸞の浄土観については、『愚禿抄』「上巻」に詳細に述べられている。
- 「土に就て四種有り。一 法身の土、二 報身の土、三 応身の土、四 化身の土。
- 報土に就て三種有り。一 弥陀、二 釈迦、三 十方なり。」(眞聖全二、四五七頁。)

- 9 『親鸞聖人真跡集成』、第二巻、四六八〜四六九頁。
 10 このような真実報土と方便化土に対する対比を親鸞は「真化対」と説いている。
 またこのような方便化土について、親鸞は『愚禿抄』「上巻」の中で次のように記している。
 「弥陀の化土に就て二種有り。一 疑城胎宮、二 懈慢辺地。」（真聖全二、四五八頁。）
 ここで阿弥陀仏の化土について二種類があるとし、一つは疑城と胎宮、二つ目は懈慢と辺地であるとし、いずれも阿弥陀仏の化土の浄土であることを主張している。
 11 山邊習學 赤沼智善『教行信證講義 眞佛土巻 化身土巻』（法藏館、一九四一年）、五一頁。
 12 桜部建「報土と化土」、一二〜二二頁。
 真聖全二、六七二〜六七三頁。
 13 細川行信『眞宗成立史の研究』（法藏館、一九七八年）、八七〜九〇頁。
 細川行信 村上宗博 足立幸子『親鸞書簡集 全四十三通』（法藏館、二〇〇二年）、一四六〜一四八頁。
 14 真聖全二、七八九頁。
 15 『歎異抄』の第十一章では、念仏を申すことも如来のほからいであると思えば、自分のはからいが交わらないために、このような行者は本願に相応して、実報土に往生するとして、阿弥陀仏の浄土が報土であると理解している。また名号の不思議を信じない行者は、方便化土である辺地、懈慢、疑城、胎宮にも往生すると記していることから、親鸞の説く真実報土について理解していたと考えられる。
 「まづ弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまゐらせて生死を出づべしと信じて、念仏の申さるるも如来の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからのはからひまじはらざるがゆゑに、本願に相応して実報土に往生するなり。（中略）このひとは名号の不思議をもまた信ぜざるなり。信ぜざれども、辺地懈慢・疑城胎宮にも
 往生して、果遂の願のゆゑに、つひに報土に生ずるは、名号不思議のちからなり。これすなはち、誓願不思議のゆゑなれば、ただひとつなるべし。」（真聖全二、七七八〜七八〇頁。）
 16 了海が記したとされる『他力信心聞書』については、以下の先行研究が詳しい。
 前掲「初期眞宗における善知識論の一形態」、三〜二四頁。
 梯実圓『他力信心聞書』の一考察（『浄土教学の諸問題』下巻、永田文昌堂、一九九八年）二五〜五二頁。
 太田心海「往生と成仏」（『中西智海先生還暦記念論文集 親鸞の仏教』、一九九四年）、四二九〜四五〇頁。
 17 洪谷晃「仏光寺の教化活動について——還相回向聞書を中心に——」（『仏光寺の歴史と教学』、一九九六年）、九九〜一二〇頁。
 佐々木乾三「還相回向聞書——光明本尊の源流——」（『仏光寺の歴史と教学』、一九九六年）、一三二〜二五四頁。
 18 眞宗資料集成、巻一、九百六十頁。
 19 眞宗資料集成、巻一、一〇〇五頁。
 20 眞宗資料集成、巻一、一〇〇五頁。
 21 佐々木英彰「初期眞宗の開展と仏光寺教団——眞宗の教えを広めた念仏者達——」（『仏光寺の歴史と教学』、一九九六年）、五八頁。
 22 洪谷晃「仏光寺の教化活動について——還相回向聞書を中心に——」（『仏光寺の歴史と教学』、一九九六年）、一〇七頁。
 了海の『他力信心聞書』や『還相回向聞書』は、善知識帰命説が説かれており、覚如は『戒邪鈔』においてこれらを批判している。この点について、梯実圓氏は『他力信心聞書』や『還相回向聞書』の二冊について次のように述べている。
 「こうして『改邪鈔』の所破の対象となったこれらのが、眞仏、源海、了海、誓海、明光、了源といういわゆる仏光寺教団とその源流になった門徒集団の中で形成され、伝持された思想信仰をまとめたものである」ということは明らかである。」

- 前掲「初期真宗における善知識論の一形態」、六頁。
- 23 前掲「初期真宗における善知識論の一形態」三二―四頁。
- 24 真宗全書六二卷、三八一頁。
- 真宗史料集成 卷五、五四〇頁。
- 25 大谷大学本の奥書には、以下のように記している。
- 「釋種專修坊空閑 元祿第七竜集用戊春三月笔切成」
- たとえば『異義集』をもとにした真宗資料集成には、正二（正見二知識法身心空一）対面ノマヘニハ使者（知識応身ノ形言）ノコトバラモチヒルベカラズトノタマヘリ。コレスナハチ本師（知識ノ心本来空ヲマモレト也。）として文字の右側に文を付け足しているが、大谷大学本には、記されていない。
- 真宗史料集成 卷五、五四五頁。
- 大谷大学蔵 宗大四一六四、下巻、九丁表。
- 27 たとえば大谷大学本には、「十四問答中」に「アルイハ観念ヲモテ念仏ヲタスケ」の文が記されているが、『異義集』をもとにした真宗資料集成には記されていない。
- 大谷大学蔵 宗大四一六四、下巻、十七丁裏。
- 28 この指摘は了海に対する指摘であり、後の仏光寺教学とは、異なることに注意すべきである。
- 藤谷信道「仏光寺の経説とその誤解―特に名帳・絵系図を中心として―」（『仏光寺の歴史と教学』、一九九六年）、六五―九八頁。
- 29 前掲「初期真宗における善知識論の一形態」、三二―四頁。
- 前掲「初期真宗における善知識論の一形態」、二〇頁。
- 30 真宗史料集成 卷五、五四〇頁。
- 31 別稿で引用した『他力信心問書』、『還相廻向問書』の引用は以下の通り。
- 了海『他力信心問書』
- 「問テイハク、浄土ノナカノ浄土トイハハ、浄土ニ真化ノ候ニヤ。シカラバ報土トハイカンガサフラフベキ。
- 師答云、極楽ニ真化ハアルマジケレドモ、難行ノモノノムマル、トコロノアルナリ。元ヨリ本願他力ノオキテノゴトクナラバ、マタクコノ義アルベカラズ。辺地・懈慢・疑城・胎宮等ハミナコレ他力ノ行ニアラザルモノノ生所ナリ。コレハ仮ナルベシ。本願成就ノ土ハ、究竟如如(空)トシテチリバカリモ垢穢ノ名ナシ。一往二百一十億ノ浄土トイフハ総ノ浄土ナリ。コノナカヨリ仮ナルコトヲエラビステ、真ナルモノヲエラビトリテ莊嚴シタマヘル別ノ浄土也。総ノ中ニハ真化トモニアリ。弥陀ノ莊嚴シタマヘル浄土ニハ、他力ノ行者ヨリホカニハムマレズ。コレ弥陀ノ至心信樂シタマヘルユヘナリ。カルガユヘニ、総ハ仮、別ハ真ナリ。」（真宗史料集成 卷五、五四二頁。）
- 了海『還相廻向問書』
- 「重ヲカサストイフハ、モト法蔵比丘ノ、ムカシノ本願ト、今日ノ直説ノ、善知識トカサナリテ、オナシク衆生利益シタマフ本迹、コトナルコトナクシテ、同一ナルユヘニ、重ヲカサストイフナリ。（中略）重ハサキノ文ノコトク、モト法蔵比丘ノムカシノ本願ト、今日ノ直説ノ弥陀ト、カレコレ和合シテ、大涅槃ヲ証ス。カレコレ和合セサレハ、果証ニアタワス。法蔵願力ノ所成ニヨリテ、今日ノ直説ハ出生ス。」（真宗史料集成 卷五、三二二頁。）
- 32 この「十三問答」は先の「十四問答」の前にあたるが、了海の実報土説に対する了海の認識を論究するため、最後に論じる。
- 真宗史料集成 卷五、五四八頁。
- 33 法然は自身の宗教的立場を指すものとして、「浄土宗」という宗名を用いていたことが指摘されている。また浄土の中の浄土とは親鸞の真実報土を指しているものと考えられる。
- 伊藤唯真『浄土宗の成立と展開』（吉川弘文館、一九八一年）三十一―四十二頁。
- 35 『教行信証』と親鸞の消息に見える「浄土真宗」の名称は以下の通り。
- 「つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往

相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。」

〔『教行信証』、真聖全二、七一頁〕

「それ浄土真宗のころは、往生の根機に他力あり、自力あり。このことすでに天竺の論家、浄土の祖師の仰せられたることなり。」

〔『末灯鈔』、真聖全一、八七三頁〕

36

ここでの「浄土真宗」という呼称は、親鸞から続く自分たちの門流を指していることが分かる。他の法然門下でも数は少ないものの、一部用いられている。たとえば信瑞(？)一二七九)が記した『明義進行集』には、「浄土真宗」とする文が見え、後の聖阿(一三三四一)一四二〇)にも「浄土真宗」の名称を用いている点が見られる。『明義進行集』と聖阿の『浄土略名目図見聞』に見られる「浄土真宗」の一文は以下の通り。

「是則彌陀本願極致、浄土真宗ノ精要ナリ、觀願當求往生者、コノ多分一同ノ化導ヲ信シテ、カノ少分異義ノ勸進ニシタカフコトナカレ」(『明義進行集』、法然全、一〇二五頁)

〔相願者事相行願直施頓極頓證之益故云相願此乃是正浄土真宗教門也問既云事相爾者不可及理性歎如何〕(聖阿『浄土略名目図見聞』、浄全十二、七二二頁)

また初期真宗内でも、まず正応元年(一二八八)年以前に記された唯円の『歎異抄』にも「浄土真宗」の一文が見られる。また覚如が「浄土真宗」という呼称を用いるのは、元徳三年(一三三一)に記した『口伝抄』が最初であるので、「浄土真宗」という呼称は、比較的早い時期に門弟達の中で、自身の門流を指す時に用いられたものであると考えられる。このような初期真宗の「浄土真宗」という呼称と自覚については、今後さらに検討を行いたい。『歎異抄』と『口伝抄』の「浄土真宗」の一文は以下の通り。

「浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならひ候ふぞ」(唯円『歎異抄』、真聖全二、五一九頁)

「おほよそ凡夫の報土に入ることば、諸宗ゆるさざるところな

り。しかるに、浄土真宗において善導家の御ころ、安養浄土をば報仏報土と定め、入るところの機をばさかりに凡夫と談ず。」

〔覚如『口伝抄』、真聖全三、二七七頁〕

37 梯実圓氏も、ここでの了海の「真宗」や「一向宗」などの宗名の主張について、次のように記している。

「真宗を一向宗と自称するのみならず、他よりも称されることこそ、法然聖人以来の正統派である証拠だと強調している。のちに蓮如が、一向宗という宗名の使用について教誡される『御文章』一帖目一五通は、これを意識されていたと考えられる」

前掲「初期真宗における善知識論の一形態」、三〇四頁。

38 当時の門弟達が「浄土真宗」などの宗名をどのように用いていたかについては、今後さらに検討する必要がある。

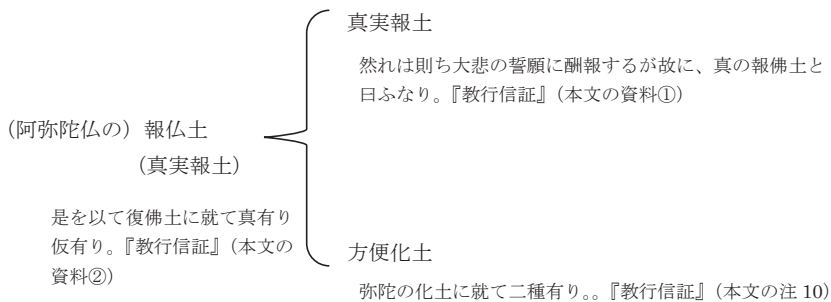
39 普賢晃寿『中世真宗教学の展開』(永田文昌堂、一九九四年)、六一、九三、一七〇頁。

キーワード

初期真宗、麻布了海、『他力信心問書』、真実報土、浄土真宗

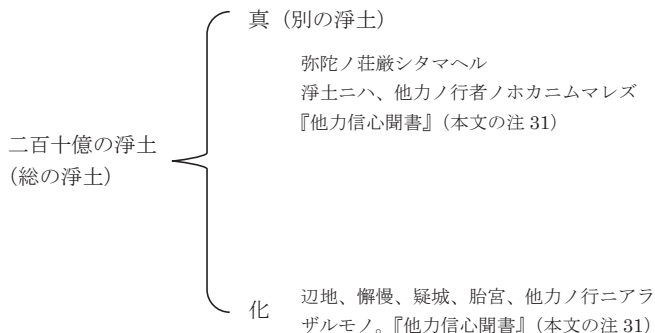
図1 親鸞と了海の眞実報土の理解

親鸞の眞実報土の理解



※親鸞は阿弥陀仏の浄土を眞実報土と方便化土に分け、これらはどちらも阿弥陀仏の浄土と説いた。

了海の眞実報土の理解



※了海は『他力信心聞書』において眞実報土を解説して、法蔵菩薩が二百十億の「総」の浄土から「化」を捨てて「眞」をとったと主張する。そして眞に分類した浄土について了海は多くの説明を加えている。たとえば、「報土」、「浄土ノナカノ浄土」、「眞ガナカノ眞」である。またこの眞に分類した浄土は、他力の行者以外は生まれないと説く。一方、化の浄土は他力の行を行わないものが往生すると説く。